

この書物が出版されたのが1927年だから、それからもう50年に近い歳月が流れたことになる。かつてわたくしも学生時代にこれを手に入れ、敬仰の念で読んだことがある。

A.Hettner先生の若かりし日、同先生が大学に学ばれたころには、新カント学派の認識論が一世を風靡し、自然科学と文化科学ないしは歴史科学との区別が峻別され、その影響で、自然と人間を取扱う地理学は科学には値しないとの見方があり、地理学の方法を統一するためにも、人間を地理学の対象から除外する意見さえあり、まさに地理学にとっては混迷の時代であったと聞いている。そんななかでできたのがこの書物かと思う。戦後の日本の地理学界のなかでも、50年前のそんな空気がなくはない。

松井先生は1935年の地理学評論第11巻第5号で、「地理学に於ける法則性と偶然性」と題し、A.Hettner先生を紹介され、早くから先生の業績に深い関心をもたれていたし、いまA.Hettner先生の考え方を伝えていただけることは結構なことである。

戦後、若い研究者達が、どの学問分野を問わず、「原点」に接することを敬遠する傾向にある、新しい地理学を更に進めるためにも、日本・外国を問わず「原点」に立ちかえて三思することが特にのぞまれよう。

松井勇先生のプロフィール

木内信蔵

松井勇教授が昭和48年3月を以て公的な生活から退かれ、新しい人生を踏出されることは、惜しいと言ひよりお喜びしたい気持で一杯である。この半世紀は、日本の社会も学界も大きな嵐の中にあつて、その煩さに係り合うことは、学者らしい学者としての松井さんに対してはまことにお気の毒であつた。兵隊としての召集訓練から学生騒動との対応まで、それらは松井さんにとって不得意であり、而も避けられないことであつたろう。これからは自由に、今までの研究を更に磨きあげて、後進に道を示して頂きたいと思う。

松井さんと知り合ったのは、私が東京帝大理学部地理学科の1年に入学してからで、40年の昔に溯る。既に大学院2年に在学して、新進の学者としての仕事を次々と発表されていた。ドイツ文献の紹介批評をはじめ、多摩丘陵をフィールドとする土地利用の研究など、理論的な方法を開拓されつつあつた。その頃の大学院には、岡山俊雄、吉村信吉、村田貞蔵などの諸氏がおられ、地形学

湖沼学・人文地理学・景観論などの研究の基礎を固めつつあった。特に1935年前後は、日本と言うよりは世界的にみても、計量地理学の黎明期であって、地形計測や人文計測を上述の諸先輩が開拓しつつあった。その中で、松井さんは、富山県礪波平野の散居集落の散布度について研究したが、ポアソン分布を示すとされた研究は、1950年代になって伸展をみた計量的研究の開拓者の一人、J.B.L.Berry教授(シカゴ大)の講義や著書に引用された。

私が松井さんの仕事を直接お手伝いするようになったのは、昭和13年からで、日本の地理的分布現象の研究に関してである。私は市町村別工業人口率などの分布とその解釈について報告した。この頃から、松井さんは文学部講師(非常勤)となり、三四郎池に近い文学部地階に研究室を持って、早朝から夕刻まで勉強されていた。この時整えられた図書・地図・器具は貴重なもので、新制大学として教養学科の中に人文地理学課程ができたときに頂戴した。辻村太郎先生は本職の地形学・景観地理学のほかに上述の計量的方法や文化地理学・地誌学等に亘って高邁な識見を持って学生を指導されたが、特に松井さんと私には人文地理学を托され、野外巡検の折には、しばしば二人が当った。松井さんは、農林省の新しい統計方法に基く資料をいち早く採って、日本の農業地域区分をまとめ、ついで、分布理論や地域理論について周到な考察をされ、この一部は学位論文となった。那須野の継続的な研究はお茶の水女子大に移ってからである。私もその初期には、自由学園の寮に泊り、生徒の作ったかぼちゃ料理を食べ、那須野の農家の面接に歩いた。

松井さんには東大時代から今日まで兄弟のようなお付き合いと御指導を頂いた。岩石標本室の一隅にある古いお茶の水の研究室では、しばしばおいしいお茶をごちそうになって、新しい学問の傾向に熱を入れ、旅行談にくつつろいだ。松井さんは聞き上手であった。近かしくしたのは学校の関係ばかりではない。松井さんは古くから本郷(文京区)浅嘉町に住み、私は関東大震災後から最近まで隣りの駒込曙町に住んだ。共に今は本駒込と改名されているが、私の家が松井さんのお宅とお茶の水大とを結ぶ最短路線上にあったので、私が寝坊していると、「松井先生が見えた」と言う家内の掛け声にあわてて起きたことも再三ではなく、また忘れたころ支給されるお茶の水の講師給を届けて下さったりした。

松井さんは酒も煙草も嗜まないが、私よりいけると思ったのは、四国だかの巡検で、接待に出されたビールのコップを干して真赤になっていたことである。早寝早起きで、夜の会合は全く不得手であるが、出席すればそれだけ努められた。小柄で若いときはコロコロしていた松井さんが食糧難の時代に骨と皮ばかりになったのはお気の毒であったが、その松井先生を抱えるようにして焼岳にあげたのは、一高山岳部の中村徳さんであり、戦没した彼は準地理学科生として巡検に参加したのであった(昭和17年)。それに比べると、われわれ悪童は伊豆大室山の巡検(昭和7年)で草山

のコニーデ斜面を先に駆け下りてしまい、松井さんを置き去りにしたのは友達甲斐なかったと言わざるを得ない。少し位のいたずらには、ニコニコして眺めていたが、脇でみていて腹が立つようなことが何回かあったであろう。そういう時には、眼鏡がきらりと光るのである。

原稿用紙にきちんと講義ノートを準備され、それを読みあげる方法は、消したり書いたりの大変な労苦を伴う仕事である。聴く方にはそれだけの手間がかかったことが分からないので、折角の滋味を汲まずに終わることも稀ではない。私はしばしば、その講義を、或は研究の記録を公刊してくださいとお願いするのだが、なかなか肯いて下さらない。後の者が同じ苦勞をし、ときには誤った方向に踏み入れないためにも、分布や地域理論についての著述があることが望しい。この願いに対して松井さんは、まだまとまらないからと言う。まとまったら研究者の生命は終わってしまうので、まとまらぬことを発表して、多くの批判を受けることが学界全般の進歩につながると思うのであるが。一層の御健勝を祈上げる次第である。

“都づくりと英雄”

尾原信彦

皆さんご存知の研究学園都市は、建設計画が既に具体化して、その輪郭もほぼでき上り、各機関の一斉移転を残すのみ、あと数年で典型的な機械文明の砦が出現することでしょう。さて筑波のように今まで市街地らしい中核の無かった平坦地に、20万ほどの都市ができると云うのですから、権力者が一旦その気になれば、何でもこんな風にできるものちお思いになる方が多かろうと存じます。

古来、英雄あるいは大政治家と云われるほどの人物ならば、首都を新たに造営する位の実力があるという説があります。古くは難波の津に都した仁徳帝、近江大津京で即位した天智帝、寧楽の都に遷都した元明女帝、(天智天皇の第4皇女(阿倍皇女)で、草壁皇子の妃となり、文武天皇の母である。女帝8年間の在位中に遷都(和銅3年)と古事記の完成(和銅5年)が特筆される。なお草壁皇子は、高松塚壁画古墳の被葬者の最有力な候補者の1人として挙げられている。(直木教授談)をはじめ、平安京に都城を計画して奠都した桓武帝、鎌倉に幕府を構えた頼朝、大阪に城市を築いて天下に号令した秀吉、江戸を開府して諸大名を従えた家康など、いづれもその範疇カテゴリーに属する人材であるとする声もあります。